

松本清張記念館

◆館報◆

2009.12
第32号



黒田征太郎さん作品（最終バージョン）

近藤等則 × 黒田征太郎 **ライブ** 作品

画家の黒田征太郎さんの絵が近藤等則さんのトランペットに反応し、Aとなり、更にB、Cへと刻々と変化して、上の作品になりました。（詳しくは七頁）



作品段階 **C**



作品段階 **B**



作品段階 **A**

目次

- 大沢在昌・宮部みゆき・京極夏彦
大極宮トークショー…………… 2
- 企画展紹介「神々の乱心」…………… 5
- 友の会活動報告…………… 5
- 生誕一〇〇年記念事業…………… 6
- トピックス…………… 8

松本清張生誕一〇〇年記念

大沢在昌・宮部みゆき・京極夏彦

大極宮トークショー

松本清張とミステリー

平成二十一年八月四日(火) 北九州芸術劇場大ホール

八月四日(火)、松本清張記念館開館十一周年のこの日、清張生誕の地・小倉に、直木賞作家の大沢在昌さん、宮部みゆきさん、京極夏彦さんをお招きし、生誕一〇〇年を記念したトークショーを開催しました。人気作家三人を迎えて、会場は一、一〇〇名の聴衆で熱気に包まれました。第二部の初めの質問コーナーでは、作家志望の人から質問が相次ぎました。三人の軽妙なやり取りに場内は沸きかえりました。



記念館にある 清張さんの書齋

大沢 会場に来る前に、三人で松本清張記念館に行ってきました。あそこに、清張さんの住まわれていたお宅がそのまま再現されています。書齋も再現されていて、タバコの焦げ跡だらけのカーペットに椅子が置かれ、デスクの上には灰皿やコーヒーカーップがあって、ついさっきまで清張さんが原稿を書いていた雰囲気があります。

宮部 「清張さんはちよつと席を外していらっしやるだけで、すぐに戻ってこられるよね」

というくらい、書齋そのものが生きていますよね。

京極 あの書齋は蛍光灯がつかっぱなしで、夜、遅くに仕事をされているという状況を再現しているわけでしょう。

宮部 お宅のすぐ横を、私鉄の線路が通っている写真のパネルが記念館に展示されていますが、清張さんは、夜明けに始発電車が走ると、「あ、始発が通る。働いている人がいる。自分だけじゃない。こんなに朝早くから働いている人がいる」と思って、また仕事に戻られたって。

清張さん、取材であちこち飛び回っていても、執筆は

必ずお宅じゃないとだめだったんですって。

大沢 記念館の館長さんいわく、別荘なんかにも全く興味を持たれなかったそうです。

宮部 ご自分の馴染んでいる本や資料が傍にないと、やっぱり落ち着かないって。

大沢 この三人の中で清張作品が一番たくさん読んでいるのは、宮部さんですね。どういうきっかけで清張さんを読むようになったの？

宮部 小学生のころ、昼の時間帯に清張さん原作のドラマをやっていて、私の帰りが早いと母と一緒に観たりするわけです。「水の炎」というドラマでしたが、「原作・松本清張」と出て、この人は？と聞くと、松本清張という偉い作家だよと教えられて。高校生になって「点と線」や「砂の器」などの代表作を読み、「小説帝銀事件」を読んだのが高校三年生くらいだったかな。

大沢 ドラマの話が出ましたが、京極さんが昨日の朝四時半ま



大沢在昌さん

でかけて作った清張作品の映像化リストによると、清張原作のテレビドラマは三百十五作品。

京極 連続ドラマや前・後編に分かれているものは一タイトルと勘定して、三百十五タイトル確認できたということです。

大沢 清張さんってタイトルをつけるのがうまいでしょう。だから「球形の荒野」とか「点と線」なんて、プロデューサーとしては「このタイトルなら視聴率が取れる」とか、「映画館にお客さんが入る」と思えるのでしょうか。

宮部 タイトルもそうですが、何十年もの長いスパンで何度もドラマ化されるということ自体がすごいんです。中身が古びていないということですから。

京極 作品自体は発表当時の社会性を十二分に反映して書かれている。それでいて根底に描かれているのは普遍的な人間像ですからね。

宮部 セット、衣裳、小道具といった風俗の部分は取り替えられます。人物造型や謎解きといった物語のメインのところには普遍性があれば、いつでも映像化できるわけですね。

大沢 人間描写が根幹に迫っている。時代が変わっても変わらない人間の本质、欲望の本

質を、きつちりえぐっているんですよ。

清張作品は生活派のミステリー

京極 これだけ作品が映像化されていながら、清張作品にはシリーズ物がないということも、特筆すべき点ですね。

宮部 「点と線」の刑事コンビが「時間の習俗」で再び登場してアリバイ破りに挑むのが、非常に例外的なケース。

大沢 ヒーロー、名探偵というものを、清張さんは信じていなかったと思います。

宮部 刑事であれ、新聞記者であれ、普通の、どこにでもいるような人が主人公。それゆえ、繰り返し登場させることができないうわけですね。

大沢 清張さん以前には、名探偵が登場し、快刀乱麻を断つごとく難事件を解決するという名探偵の時代がありました。

一方、清張さんが描いたのは、しわくちャのコートを着、あんパンを食べ、靴底をすり減らして捜査する刑事です。

京極 清張さんは、社会派ミステリーの祖という言われ方もしますね。

宮部 社会派というと、社会構造の歪みゆえに起こった事件を描くという大きな構えのイ



宮部みゆきさん

メージがありますが、清張さんの作品の大事なところを占めているのは、「生活派」のミステリーだと思いますね。特に短編はそうです。戦後、価値観が大きく変化した時代を舞台に、当時の知識人がどうやって自らを正当化したかという、清張さんが好んで描くテーマがあります。その代表的な短編が「カルネアデスの舟板」ですけれど、社会的な問題を扱いつつも、今の暮らしを守りたい、ただ食べていきたい、そういう慎ましやかな生活を守るために罪を犯してしまう人間性のほうに焦点が置かれています。

京極 生活そのものが動機になる。だから、やっぱり「生活派」

だろうなと思います。歴史小説では、丹羽長秀とか、メジャーでない武将を取り上げるんです。さらびやかな主役の周りにいて支えた人とか、主役級の人がいなかったために第一線に浮かびあがれなかった人、生涯不本意ながらも懐刀

に徹しなければならなかった人、人生の最期の最期に敢えて反逆して死んでいく人。日陰でどこか屈折した人間の哀しみ、生きがい、プライド、怒り、それもまた、時代を超えて読者の心をとらえる要素だと思います。

大沢 家に閉じこもって資料に囲まれて書齋で原稿を書くという毎日の生活の中で、時代の風俗であるとか、その時々庶民の感覚というものをどこで吸収していたのか。よほど好奇心旺盛な人でなければ、あれだけの作品は生み出せないと思います。

京極 とてつもない勉強家ですよ。いわゆる学歴をお持ちではない。そういう意味ではない。ご苦労もされたと思いますが、そのぶん社会人になってから、ご自分で学ばれているわけですよ。私が最初、松本清張に接したのは、「古代探求」でした。清張さんは古代史に非常に造詣が深いですね。昭和史の分野でも、二・二六事件をはじめとして大胆な仮説を数多く提示されています。過去のこと、同時代のことも、同じスタンスで学ばれ、吸収されていたような気がします。

大沢 小説家というのは、家を

一歩も出なくても書くことができます。それは空気を感じとるセンスというか感覚というか…。

宮部 特急や新幹線に乗るときなど、ふとした瞬間に世のこのことを摂取することができたのでしよう。目が良くて耳が良いタイプの作家だったと思います。

大沢 電車に乗り、あるいは道を歩いていて、いろんな人とすれ違う。この人はどんな仕事をしているんだろう、趣味は何だろう、と私も考えるんですね。どうやら、お洒落が好きそうだな、なんて、見えたものを核にして想像を組み立てていく。小説家って、そういうタイプが多いと思うんですよ。それが物語の人物造型にどこかで活きる。

清張さんの達磨絵

大沢 清張さんは朝日新聞広告部の意匠係にお勤めになっていて、いわばデザイナーでもあります。清張さんの自画像も展示されていました。

宮部 味のある、素敵な自画像です。

大沢 京極さんも実はデザイナーであり小説家でありますが、

今日、彼がすごいものを持ってきたらしい。

京極 有田に十四代今泉今右衛門さんという陶芸家の友人がいますが、清張さんは先代の十三代今右衛門さんと親交がおり、有田のお宅に寄られたおり、清張さんがご飯を食べているときに、「ちよっと紙を貸してくれ」と言っていて、さらさら達磨の絵を描いた。さらさら皿から割りばしでちよちよちよっと醤油を取って色を付けたという。

その絵というのが（絵を取り出して）これなんです。本邦初公開！
一同 すごい！



京極 この達磨の顔のあたりが醤油で描かれているらしい。これはカラーコピーですけれど、禅画的な絵というのは空間の配置が非常に難しいのですが、その辺がとても巧みですね。やっぱりデザイナーでいらしたんだなと思いますね。

大沢 朝日新聞にお勤めだった

清張さんが作家になるきっかけが、週刊朝日の「百万人の小説」という懸賞募集。デビュー作となる「西郷札」を応募して入選されたんですね。

京極 その「西郷札」がいきなり直木賞候補になって認められ、「或る『小倉日記』伝」で四十三歳のときに芥川賞を受賞。

大沢 もともと直木賞の候補になつていたところが、選考委員が「これは芥川賞だろう」と言つて、芥川賞の選考に回された。

京極 大衆文学としてノミネートされたものを、選考委員がこれは純文学として評価する方がよいだらうと判断して「回した」わけですね。



京極夏彦さん

大沢 良いものを世に送り出そうという、選考委員も立派です。

宮部 清張さんは、「自分はデビューが遅かったから時間がない、時間がない」と、ずっとおっしゃっていたそうです。書きたいものがたくさんあつ

て追いつかないって。

現代の松本清張は

大沢 清張さんは貧しい家に生まれて大変な苦勞をされた。

当時の日本は家が裕福であるとか貧しいとか、あるいは学歴があるとかないとかによつて厳しい格差があり、清張さん自身も差別をされて悔しい思いをした。そういった経験や思いが、小説家として長く書き続けていく原動力になつたと思います。今の日本もまた厳しい経済状況にあり、清張さんの時代とはまた異なる形での格差が生じてきているように思う。差別をされたり、悔しい思いをされている人たちの中から、その思いを小説にぶつけようという若い人が出てきてくれるのではないかという期待を、私は持つているんです。

一方で、ネットというものの出現が読み手のために書くという意識を奪っている、自己満足のため書いているような気もしているのですが。

京極 ネットを使えば、プロが書いたものでも、素人が書いたものでも、デザインも、フォントも含めて外形上まったく差が無い形で世界中に問うこ

とができます。だから発信した段階で自己満足してしまうケースも多いでしょう。

原稿が活字になつて印刷される、つまりマスメディアに載るといことが、大きな意味を持つていた。そういう時代に松本清張はデビューしている。しかも、清張さんの小説が世に受容されていく過程というのは、続々と週刊誌が創刊し、雑誌文化が拡張していく時期とぴったり重なつていくわけですね。

大沢 昭和三十年代の半ば頃ですね。

京極 それはまた、テレビが大衆娯楽のトップに躍り出た時代でもあります。つまりメディアの在りようが飛躍的に転換した時代なんです。清張さんはほとんどの週刊誌に連載をもち、テレビドラマに次々と原作を提供した。だからこそ松本清張作品は爆発的に拡大・浸透したわけですね。結果的に推理小説というものがそれまでの探偵小説から脱却して、一つの文芸ジャンルとして成立したという背景があるわけですね。

大沢 そのとおりですね。

京極 松本清張作品は時代を超えて親しまれる普遍性を持つているけれども、一般に広ま

る過程においては、当時の社会構造を利用したようなところがある。それでいながら、作品には当時の社会構造自体に対する清張さんの強い不信感、批判が織り込まれていたわけですね。

大沢 怒り、でしょうね。

京極 では、今はどうか。自己表現も情報発信もますます簡単にできるようになつてきているけれども、反面、そうした状況を利用して、現代の松本清張が生まれ出るような環境にあるのであろうか、考えるところ、難しいのではないかと。

大沢 清張さんがかつてそうであつたように、社会の底辺に近いところで、怒りとか、満たされぬ思いとかいうものを、文学的な「書きたい」という欲望につなげていく、作品にどんどん結晶させていくということは、今の若い人たちにはなかなかできづらいと思う。貧しいけれども物がある時代ですから、たとえばネットでネットカフェ暮らしをしていたとしても、そこには食べるものがあり、目の前にパソコンがあつて、情報も得られ、発信もできる。こういう状況下で、清張さんのように怒りや不満を表現として結晶していけるのか。難しい時

代だと私も思います。

宮部 今ほど「小説を書きたい！」という人たちが多い時代はないように感じます。どこか閉塞感があつて、何かを表現したいと思う人が増えているのではないのでしょうか。近年ふたたび清張ブームが興つたのは、大沢さんがおっしゃるように日本に新たな格差、新たな貧困が生じ始めた時期と重なつていっているように思います。これは社会にとつては悲しいことですが、だからこそ現代の松本清張を生み出す一つの時代環境になればいいな、と願つていました。

大沢 人の世がある限り、物語は書き続けられていくものです。これからも皆さんには小説を愛していただきたい。特にこの三名の、中でも私の小説を愛していただきたい(笑)。

一同 今日はどうもありがとうございます。



II 播種——『昭和史発掘』から

松本清張生誕 100 年記念特別企画展

松本清張が謎の新興宗教の存在に突きあたったのは、『昭和史発掘』の執筆中であつた。二・二六事件を調べていくうちに、同じ昭和11(1936)年に新興宗教と宮中とが結びついて起きた、二つのくある



「島津ハル事件」新聞記事
(取材資料)

意味で重要な事件)が目にとまったのである。「島津ハル不敬事件」と「神政龍神会事件」である。

IV 絶筆—— 〈本当に瑞々しい作品は〉

〈本当にみずみずしい作品は、若い頃には書けないものだ〉

遺作「神々の乱心」はこの松本清張自身の言葉のとおり、若々しくまるで枯老を感じさせない。壮大で深遠なテーマに最後の情熱をほとばしらせ、想像力を奔放に解きはなつた小説である。



「神々の乱心」絶筆原稿

——乱心の〈神々〉はどちらにどくのか——

神々の乱心

松本清張 最後の小説

開催期間

平成22年
1月9日(土)

3月31日(水)

会場

記念館地階
「企画展示室」

I 「神々の乱心」の世界

「神々の乱心」は、新興宗教「月辰会研究所」の教祖が、宮中と軍隊に勢力を伸ばし、天皇権力を手中にしようとする、とてつもない野望を描いたスケールの大きな小説である。

〈昭和初期〉という時代と〈天皇制〉の深奥に迫る、壮大にして深遠なテーマを小説で描ききろうとした野心作である。



挿画 小泉孝司画・所蔵

III 開花——昭和の終るころ

昭和63(1988)年の夏、松本清張は次の連載小説について「やはりあれにしようか」と言った。二十年余、「いつか小説にしておきたい」と執心してきた題材だった。新興宗教と宮中というタブーを抱える題材に敢然と立ち向かうことを決意したとき、まさに〈昭和〉は終ろうとしていた。



「神々の乱心」
創作ノート

取材資料

友の会 活動報告

●文学散歩

今年度の文学散歩は柳川方面へ。昭和55年に清張自身が訪れたルートを参考に各所を訪問しました。柳川では北原白秋記念館の見学、春日市では奴国の丘資料館で当時清張を案内したという職員の方とお会いすることができ、当時の清張の貴重なエピソードを聞くことができました。もちろん柳川名物うなぎも食べてお腹も大満足!楽しい一日となりました。



●生誕 100 年記念巡回展ツアー

全国各所で行われている松本清張展(巡回展)の見学と各地の会員との交流もかねてツアーを実施しました。5月には東京へ。世田谷文学館を見学、明治座で「黒革の手帖」国立劇場で「左の腕」も観劇しました。9月には姫路へ。姫路文学館の友の会の方々との交流は今後の活動に大変意味深いものとなりました。そして東北へ。仙台文学館主催の「ライブ文学館」に参加。貴重な体験をさせていただきました。また青森まで足をのぼし斜陽館へ。清張と同じ年に生誕100年を迎えた太宰治の故郷への旅。

これまでの友の会事業の中でもまたとない素晴らしい旅となりました。



松本清張生誕一〇〇年記念事業

平成二十一年に行われた松本清張生誕一〇〇年を記念する催しを紹介します。

特別企画展

「一九〇九年

生まれの作家たち

— 大岡昇平・中島敦・太宰治・
埴谷雄高・松本清張 —

一月十一日(日)～八月三十一日(月)、記念館地階企画展(示室で開催された企画展に延べ二万名が訪れました。



谷川俊太郎・小室等・谷川賢作 『詩と歌と音楽が言霊になつて』

三月二十四日(火)、記念館地階企画展示室前ホールで、谷川俊太郎さん、小室等さん、谷川賢作さんがライブを行いました。谷川賢作さんは常設展示室2のBGM「終わらなげ探求」の作曲もされていますが、記念館での演奏は初めてです。三人が織り成す言葉と音楽は館内に響き渡り、二百四十名の聴衆を包み込みました。



左から小室等さん、谷川俊太郎さん



谷川賢作さん

「SEICHO」— 清張をフラメンコで踊る — Visual Art Performance —

四月十七日(金)、記念館地階企画展示室前ホールで、世界的なフラメンコのバイラオール(男性舞踊手)斎藤克己さんによる、新しいダンス・シーンの試みとして、松本清張の名作「天城越え」を、フラメンコ・ヴァージョンで表現しました。会場を埋めた百八十名の観衆は幻想の世界にしばし浸っていました。



斎藤克己さん

松本清張生誕一〇〇年記念巡回展出発式

四月二日(木)、記念館玄関前で、全国巡回展の出發式が行われました。満開の桜が咲き、五十名の人が見送る中、最初の開催地「世田谷文学館」へと展示物を載せたトラックが出発しました。



前進座朗読劇「点と線」

四月十八日(土)、記念館屋外特設ステージで、記念館友の会主催で「前進座」による朗読劇が催されました。今年は「点と線」を上演、百名の聴衆が春の宵のひととき、清張ミステリーの傑作を堪能しました。



左から柳生啓介さん、浜名実貴さん、津田恵一さん

清張原作舞台劇 「或る『小倉日記』伝」

十月二日(金)～三日(日)の三日間、北九州芸術劇場で、「前進座」が「或る『小倉日記』伝」を上演しました。芥川賞を受賞したこの作品の北九州での公演は初めてのことです。三日間で約千八百名が鑑賞しました。



左から浜名実貴さん(ふじの妹、おもと役)、柳生啓介さん(田上耕作役)、北澤知奈美さん(耕作の母、ふじ役)

松本清張を視る(ミル)×聴く(キク) 近藤等則×黒田征太郎ライブ



左から近藤等則さん、黒田征太郎さん

九月二十五日(金)、記念館屋外特設ステージで、画家の黒田征太郎さんとトランペッターの近藤等則さんが清張の世界を絵と音で表現しました。トランペットが夜空に響き、黒田さんの絵が変化していくにつれて、会場の二百十名も一体となり、熱気があふれました。

清張似顔絵コンテスト入賞作品展

九月十九日(土)、記念館地階ミュージアムショップ前に、似顔絵コンテストの入賞作品二十八点が展示されました。展示期間は、平成二十一年十二月二十八日(月)までです。



ブレス・パッセージ2009 火の路

九月二十六日(土)、記念館屋外特設ステージで、小説「火の路」をテーマに田中泯さん(ダンス)、姜泰煥さん(アルトサクソス)、大友良英さん(ギター)、齋藤徹さん(コントラバス)がライブを行いました。百二十名が演奏とダンスパフォーマンスを鑑賞しました。



左から田中泯さん、姜泰煥さん

生誕一〇〇年記念 墨書展

十一月十四日(土)、記念館二階エレベーターホールに、墨書展の応募作品三十一点が展示されました。展示期間は、平成二十二年一月三日(日)までです。



画文集『清張紀行一〇一景』原画展

十月五日(月)～三十日(金)、記念館地階企画展示室で、生誕一〇〇年を記念して、清張紀行の会が刊行した画文集『清張紀行一〇一景』の原画展が開催されました。約二千名が訪れました。



その他開催された松本清張生誕100年記念事業行事

4月9日(木) | 猪瀬直樹講演会「地域の文化とまちづくり～松本清張生誕100年を記念して」北九州芸術劇場 北九州青年会議所 約600名

5月16日(土) | 半藤一利講演会 北九州芸術劇場 小倉東ロータリークラブ 約800名

8月1日(土)～9月4日(金) | 清張原作映画特集(初日に「波の塔」のヒロイン役を演じた有馬稲子さんのトークショー開催 約300名) 小倉昭和館

9月19日(土)～20日(日) | 清張ウォーク 第3回 北九州無法松ツアーデー マーチ 約5,000名

10月2日(金) | 清張原作落語「女義太夫」笑福亭円笑公演 北九州芸術劇場 約140名

10月17日(土)～11月6日(金) | 清張原作映画特集第2弾 小倉昭和館

10月31日(土) | 五木寛之講演会「松本清張の時代」九州厚生年金会館 北九州青年会議所 約1,400名

11月21日(土)・22日(日) | 青春座舞台劇「ゼロの焦点」北九州芸術劇場 約1,300名

清張生誕100年記念事業

●お問い合わせ

松本清張生誕100年記念事業実行委員会事務局
TEL : 093-582-3275 / FAX : 093-582-1055

●ホームページ

清張生誕100年記念事業の情報が一目でわかるホームページを開設しています。
<http://www.seicho-100.com> ホットな情報を随時更新中。

第12回

松本清張研究奨励事業募集

募集要項

- 対象 ①松本清張の作品や人物を研究する活動
②松本清張の精神を継承する創造的かつ斬新な活動(調査、研究等)
- ※上記①②の活動で、これから行おうとするもの。ジャンル、年齢・性別・国籍は問いません。ただし、未発表に限ります。個人又は団体可。
- 内容 入選者(団体)に200万円を上限とする研究奨励金を支給します。
- 応募方法 今後取り組みたい調査・研究テーマ等の内容が具体的に分かる企画書、予算書、参考資料(様式は自由、ただし日本語)を、平成22年3月31日までに提出してください。

※詳しくは記念館までお問い合わせください。

平成21年度

松本清張記念館学芸員の講演

平成21年度に記念館学芸員が依頼を受けて行った講演は次のとおりです。
(平成21年12月20日現在)

月日	依頼者	演題	講師
6/3	南丘市民センター	文学講座「松本清張記念館見学とドキュメンタリー映像『日本の黒い霧』鑑賞	小野
6/23	長尾市民センター	市民講座第1回「点と線」	中川
6/30	長尾市民センター	市民講座第2回「朝日新聞社時代の松本清張」	小野
7/7	長尾市民センター	市民講座第3回「一九〇九年生まれの作家たち」	柳原
7/10	生涯学習総合センター	「一九〇九年生まれの作家たち—近代百年の光と影—」	柳原
7/15	藤松市民センター	市民講座「松本清張を語る」	柳原
8/29	姫路文学館	巡回展記念講演「『点と線』誕生—清張はなぜ推理小説を書いたか」	中川
10/4	仙台文学館	巡回展記念講演「作家・松本清張の誕生」	中川
10/27	筑紫野市民図書館	「松本清張と図書館のはなし—生誕100年にちなんで」	柳原
12/20	高知県立文学館	巡回展記念講演「作家・松本清張の誕生」	中川



2009年

編集・発行

松本清張記念館

〒803-0813
北九州市小倉北区城内2番3号
TEL 093 (582) 2761
FAX 093 (562) 2303
http://www.kid.ne.jp/seicho
制作 (株)エディックス

- 開館時間 午前9:30～午後6:00 (入館は午後5:30まで)
- 休館日 年末(12月29日～12月31日)
- 観覧料 一般/500円(400円) 中・高生/300円(240円) 小学生/200円(160円) ()は30人以上の団体
- アクセス JR: 小倉駅から徒歩15分 西小倉駅から徒歩5分 小倉駅からは100円バスをご利用いただくと便利です(小倉城・松本清張記念館前下車) 車: 北九州市都市高速、大手町ランプより5分



平成21年8月4日(火)、北九州芸術劇場大ホールで、清張似顔絵コンテスト表彰式及び第11回研究奨励事業奨励金贈呈式が行われました。

清張似顔絵コンテスト受賞者

- 最優秀賞 木下 義信(広島県)
北九州市長賞 横島 正彦(福岡県)
九州産業大学賞 宇田川 のり子(東京都)

研究奨励事業入選者

- 企画名 『黒地の絵』の英訳
入選者 加島 巧(長崎外国語大学教授)
- 企画名 松本清張が追った、ヨーロッパの幻影を求めて—欧州統合運動の隠された一面—
入選者 前田 洋平(筑波大学人文社会科学研究所)
- 企画名 松本清張の小説世界と今の中国社会の類似性について—時代背景と人間の共通心理を視点に—
入選者 張 雷(南京師範大学准教授)

●編集後記●

今号は、この1年、記念館で行われた清張生誕100年の催しを中心にお届けします。特別企画展、全国巡回展、講演会など多くの皆様にご来場いただき、大変盛り上がりました。1月からの特別企画展の開催など来年3月まで生誕100年記念事業は続きます。ご期待ください。

(西本 衛)

